The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ ANTONIN ARTAUD『ARTAUD LE MÔMO』ŒUVRES COMPLÈTES XII, Éditions Gallimard, 1974
Author(s)	山森, 裕毅
Citation	年報人間科学. 2005, 26, p. 317-323
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25870
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

ANTONIN ARTAUD
『*ARTAUD LE MÔMO*』
ŒUVRES COMPLÈTES XII

Éditions Gallimard, 1974

山森裕毅

ドゥルーズならば詩は言い換え不可能なものであり、ただ反復し暗誦するものだと言うだろう。となれば詩を翻訳することは、その詩とは全く別のものを作り出すことになるだろうし、さらにそれを解釈していくとなればその行為はいかがわしいものにしかならないだろう。以上のことを承知しつつも、ここで扱うのはアントナン・アルトーが一九四六年に書いた詩、『アルトー・ル・モモ』である。

この詩は「アルトーの帰還、ル・モモ」、「中心-母と守護聖人-子」、「絶対的なものに対する冒瀆」、「テキスト外の図版」、「父-母への憎悪」、「発狂と黒魔法」の六編の詩から構成されている。「テキスト外の図版」はノートに描かれたデッサンであり、そこに文字が書き込まれたものである。ポール・テヴナンやデリダが言うように、ここに書かれた文字をこのデッサンと切り離せるものなのか、その文字もデッサンなのではないか、という考えに従いつつ、同様にこのデッサン自体詩ではないのかと解釈し、これを一編の詩と捉えた。デッサンの一部であるがゆえに翻訳不可能な文字と、詩でありながらデッサンでもあるために暗誦不可能な詩。

アルトーについて略歴を示しておくことにする。フランス人、一八九六年に生まれ、一九二〇年頃より詩を発表し始め、シュルレアリスムに参加そして離反、一九二七年に演劇家としてアルフレッド・ジャリ劇場を旗揚げするも興行的に失敗、一九三〇年代には新たな演劇活動として残酷演劇を提唱、しかしこれもまた興行的に失敗に終わる。演劇と平行して映画に俳優やシナリオライターとしての仕

事をするが、アルトーの考える映画と商業主義的な映画の折り合いがつかず、映画に裏切られた形で映画界を去る。演劇・映画の失敗の後、一九三六年メキシコにインディアンの秘術を授かるための旅に出る。しかし、そこでもまた近代化したメキシコのインディアンの形骸化した儀式に失望。一九三七年、アイルランド旅行中に狂人として逮捕・強制送還、精神病院送りとなった。その後、一九四五年まで精神病院をたらいまわしにされ、電気ショック療法など過酷な治療を強いられた。一九四五年退院後、一九四六年『アルトー・ル・モモ』、一九四七年『ヴァン・ゴッホ』、一九四八年『神の裁きと訣別するため』を発表。一九四八年に肛門の癌により死亡。詩、評論、演劇論、シナリオ、映画論、講演記録、手紙、特に多産であった精神病院時代のノートなど多くの作品を残す。

彼の人生が失意の中の彷徨であるにもかかわらず、彼の残した作品は多くの哲学者・思想家・芸術家に大きな糧を与えるものとなった。本国フランスでは、ブルトン、ドゥルーズ、デリダなどに、日本では寺山修司などに。

『アルトー・ル・モモ』に戻るとして、さて一体どこから始めればいいだろうか？難解な表現、多用される卑猥な言葉、辞書にない言葉、数々の造語…。そもそもタイトルの「LE MÔMO」が訳せない。幾つかの辞書で調べてみたが「MÔMO」は載っていない。松浦寿輝は「餓鬼」と訳しているがこれは「môme（子供）」である[1]。同じように考えるなら「meme（同じ）」もあるし、「mono（単一の）」や「maman（ママ）」の可能性もあるが、やはり「môme」が妥当だろうか。確かに「子供」とすれば、「父・母への憎悪」などいくつか見通しが立ってくる。ここから先は「子供」を手がかりにしつつ、この詩を見ていくことにしよう。

「アルトーの帰還、子供」について、いくつかの引用。

「（君は彼に何も演じない、神、
なぜならそれは私だから。…）」
「私は堅いものと柔らかいものを通り過ぎた、
手のひらの中でこの肉を拡げた、
…

しかし、いったい何、君、狂人？

私？」
「尻とシャツの間に、
愛液と下に・置くことの間に、
陰茎とイレギュラーバウンドの間に、
膜と刃の間に、
…

生きるために
がつがつ食って
アルトー

子供
…
私よりも早く
そしてより高く勃起した他者
私よりも高く
私自身の中で
…」

「ひとつの楽園である
無知の中で
地上で思い上がった最初のものは
お前を再び作り直したこの洞窟の中にいる
父あるいは母ではなく
私の錯乱に縛り付けられた
私である」

少し長くなったが、これらの引用に「子供」を巡る言説が含まれている。一つ目の引用では神は私であると言っているが、これはキリスト教を指しているように思われる。キリスト教には無学なので父-子-精霊の三位一体か、処女懐胎かわからないが、アルトーは常にキリスト教を批判の対象にしてきた。

二つ目の引用で、堅いものと言われるものは男性器を指しているだろうし、柔らかいものは女性器を指しているだろう。私はこれらのものを通り過ぎる、そして生まれた私は狂人なのか？

三つ目の引用で私は無知の楽園の中で思い上がっている。ここで父と母はただの生殖器としてしか描かれていない。

無知の中で神、それは私であると思い上がっている私は狂人だろうか？この問題はアルトー自身に向けられた問題ではない。アルトーは自分を狂人だと思ったことはない。それは『ヴァン・ゴッホ』の中に明瞭に現れている。アルトーにとって狂人とは常に社会のほうなのだ。つまりこの問題は社会に向けられている、こう言ってよければ父と母に向けられている。父よ、母よ、狂っているのはあなたたちじゃないですか？

とすればいったい何が狂っているのだろうか？

デリダはアルトーのデッサンについて書いた『基底材を猛り狂わせる』の中で次のように書いている。

「…ただ単に或る家族が一人の子供の出生届を出し、その子に名前を与え、言い換えればその子の名を彼から奪い取るその瞬間に、彼の固有の内なるいかなる「自我」も、家族によるあの新生児の財産収奪を運命づけられている、という真実を。そしてこの新生児は、まさにこの財産収奪、この欺瞞、この重罪によって体格が形成され、固有の意味で教育されることになるのだ。…そこから生じる諸々いっさいとともに、それは迫害を創始する、自我の名の内で、私の名前の中で、その名が何であろうと、また私が誰であろうと。[2]」

父と母が子供に名前をつけることは、その子供からその子供の財産を奪うことになる。名づけられることで自分の名前を失う。名づけられた名前は固有名ではない。名づけられた名前に私のあらゆる

ものが従属する。私に名前がついているのではなくなり、私が名前についている。名前を埋めるために、包まれた生の状態から身包み剥がされた存在の状態へと引きずり出される。名前の身体化。社会性の獲得。

生物学的な父と母と子供の絆。これは人間的な刷り込みではないだろうか？生物的な父であるだけで、一生涯彼を父と思い続ける理由はどこにあるのか？アルトーはこの詩において現在の父と母と子供の関係を批判し、新たなる関係を作り上げようとしているのではないか？

一九三四年に書かれたアルトーのテキスト『ヘリオガバルスまたは戴冠せるアナーキスト』はそのような要素を含んだものと言ってよいだろう。ヘリオガバルスとはローマ帝国の少年皇帝の名前である。このテキストはヘリオガバルスを主人公にしながらも、彼(＝彼女)を主体として活躍させることはない。何がヘリオガバルスを形成したかを延々と書いたものである。アルトーはまず彼を形成する要素として、三人の女を取り上げる。大伯母、祖母、母それぞれが彼を王にするために暗躍する。それぞれは独特の力を持ち、それがヘリオガバルスに注ぎ込まれる。また二人の対照的な家臣。そしていくつもの神話の神の名前を合成したような名前。両性具有。アナーキー状態を一人の皇帝が担う。それはアナーキー状態がひとつの名前を持つことである。それ自身アナーキー状態にある名前をひとつの名前が担っている。ヘリオガバルスは子供であるが父と母の子供ではない。精子の河の中で生まれた。アナーキーの中で生まれた。子供を子供たらしめるのは父と母ではなく、子供を形成するすべてのものだ、そしてそれはアナーキー状態にある。あるいはこういうことかもしれない。子供とは父と母による生産物ではなく、父と母を受け入れる器、名前を受け入れる器、そしてさらに大きなものを受け入れる器である。

基底材とは、とデリダは言う、「すなわち不感無覚で、超越していて、…すべての形象を蓄える形象不可能な集積場。変わることなく保持しているその不壊の特性は、…自身の上にありとあらゆるフォルムを受け取るのに十分なほど未決定状態にあり、不定形であるということ、これだ[3]」。この基底材を子供と理解することができる。

つまり子供とは、己を否応なく変換しにやってくる不可逆的な決定性（アルトーが「残酷」や「神経」と呼ぶもの）に己を開くという態度のことである。このとき父と母は生殖器の別名でしかない。

何が彼に父と母をそれほどまでに憎悪させたのか？詩に戻って「父‐母への憎悪」を見てみよう。いくつかの引用。

「諸々のものを作るのはひとつの精神ではなく、

ひとつの身体である、卑劣な欲求を持たされたために、
その鼻に詰め込むための陰茎を使って」

「いくつかの精神は知性の一瞬を獲得する
私を俯瞰しながら、私、最下層において
彼らは獲得する
食物あるいは阿片の不在によって

私の太鼓腹の中で、
（底に基づいた文化の）底の渦の上の渦、
彼らが彼らの祖先の腐敗を裏切ったあとで」
「…性行為のぞっとする匂い
私はあの世からのいくつかの精神によって女淫夢魔に交わられ
ただけだ、—
…
中身の詰まった彼らの睾丸をこすること、
十分に愛撫し十分に握った
彼らのアヌスの運河の上に、
私の生を疲れさせるために」
「「あなたの精液は非常に良い、
ドームの一人の監視人が、
ある日私に言った
その監視人は玄人を自任した、
そして人々が「かなり良い」とき、
「かなり良い」、もちろん、
人々は高い値を支払ってしまう
彼の評判に」」

「父-母への憎悪」と題されているにもかかわらず、父と母はまったく登場しない。ここでは何が描かれているのだろうか。おそらくセックスへの憎悪だろう。アルトー自身、精神病院から送ったいくつかの手紙の中に、自分は童貞でありマスターベーションすら忌み嫌っていると書いている。これはキリスト教との対立の中で書かれたものであるので、詳しく触れることはできないが、精神よりも身体、特に感性的（物質的で神経的）なものに重きを置くアルトーがセックスを否定するというのはどういうことだろうか？

一つ目の引用は、異常なまでに物質にこだわるアルトーが、それを生み出す身体は卑劣な欲求に捕らわれていると言う。これはそのまま欲情のことであり、それを卑劣なものと捕らえている。しかし『ヘリオガバルス』では性的欲求を黒い力と呼んで特別視したのではなかったか。これについては精神病院での深く遠い思索の旅を記録した膨大なノート群を精読しなければならないが、まだそこまで力及ばずここで語ることはできない。

二つ目の引用は、精神が知性を獲得する瞬間を描いているが、この知性に反するものが性的欲求であろうか？知性は二つの仕方で獲得される。一方は食物や阿片など身体に吸収されるものの不在によってである。これは消化行為の否定であるとともに排泄行為の否定である。そして排泄器官は生殖器でもある。他方は祖先を裏切ることによって得られる。性行為の否定は、同時に生殖行為の歴史を否定することにもつながる。つまり、父と母と訣別するためには己の性行為を否定せねばならないということ。子供のままでいるためには父と母になってはいけない。そして己が父と母の排泄物としての子供ではないということ。消化器官でもなく排泄器官でもなく、もちろん生殖器でもなく、器官なき身体を獲得すること。

三つ目の引用は、現実での性行為の否定しつつも夢の中で性的欲求に悩まされるアルトーを描いているのだろうか？そして現実の性行為は彼の生を疲労させる。夢＝性＝精神分析＝エディプス？悲劇から精神分析へ引き継がれる父と母と子供。悲劇に対して残酷演劇を。

四つ目の引用は、優生学なのだろうか？良き父と良き母からは良き子供が生まれる。人々はそれに高い値を払う。現代の問題と絡めるならば、生殖医療ということになるだろうか。能力としてしか存在しない父を持つ子供の誕生。代理出産。性行為なしの生殖行為、複数化する父と母。希薄化する父と母と子供の絆。古い価値観の崩壊と新しい価値観の到来。新しい人間関係の創立。それを描き出したのは確かいくつかのジャパニメーション[4]。

とにもかくにも、生殖行為としての生殖器(父と母)、性行為としての生殖器、排泄行為としての生殖器が憎悪の対象となる。アルトーと器官についてドゥルーズの「裁きと訣別するため」からの引用。

「諸器官は、裁き手でありかつ裁かれた者である。…赤ん坊が呈示しているのはこの生命力、すなわち、執拗で頑なで飼い馴らしがたく、あらゆる器官組織的な生とは異なる、そんな生きる‐意志である。…「子供の自我、幼な子である意識」たるモモ・アルトー。…誰一人裁きによって成長する者はいない。そうではなく、いかなる裁きも前提としない闘いによってこそ人は成長するのだ[5]」

子供は生きる‐意志である。成長するために闘う。器官は裁きである。排泄するために消化する。

神、父と母、ここまで私を名づけるもの、私を子供として扱うものの二つの体制について触れてきたが、「発狂と黒魔法」で、アルトーは第三の体制を語る。それは精神病院の医師たち。彼らは新たなる名づけるものとなる、つまり「アルトーさん、あなたは頭がおかしいようです[6]」。しかし狂っているのはアルトーなのか、彼らなのか？アルトーにとって狂っているのは彼らのほうである。医師たちへの批判は『ヴァン・ゴッホ』と言う作品に結集していく。ゴッホの異常と呼ばれる行動を明晰な論理に基づいた行動として読み替え、名づけること(診断し、排除すること)の権力を批判した。これは精神病院生活の体験の中で得たものであり、ゴッホはそのままアルトー自身でもある。

まとめよう。『アルトー・ル・モモ』のなかで何が行われたのか。それは名づけることの権力を告発することである。それは三つの体制、つまり神学、父と母、精神科医として現われてくる。それはまた生殖器の三つの次元、つまり生殖行為、性行為、排泄行為として現われてくる。そして三つの体制と三つの次元から社会が形成される。アルトーはそこから名づけられるもの、つまり子供を救い出そうとする。なぜなら子供とは、存在の状態に引き摺り出され、固有名を奪われ、その生を疲労させられ、社会に適合できなければ排除されるものであり、そしてアルトー自身がその子供であるからだ。では、どのようにしてこの権力から逃れるのか？それは子供の概念を書き換えることによってである。子供であること(être le môme)

から、子供になること (devenir le MÔME) へ。

先に上げたデリダとは違う文脈から固有名について挙げて終わりにしよう。ドゥルーズの「口さがない批評家への手紙」からの引用。

「ひとりの個人が真の固有名を獲得するのは、けわしい脱人格化の修練を終えて、個人をつきぬけるさまざまな多様体と、個人をくまなく横断する強度群に向けて自分を開いたときにかぎられるからだ(7)」

注

(1) ここで松浦が「MÔMO」を餓鬼と訳して子供と訳さなかったのは、「enfant(子供)」との混同を避けるためだと思われる。ここで私が重要視するのは、子供という概念に対して餓鬼という概念を立てることではなく、子供という概念が持つ伝統を浮き彫りにして、また新たに書き換えることであるため、あえて子供のままにした。

(2) Jacques Derrida, Forcener le subjectile, *Antonin Artaud. Dessins et portraits*, p72, Éditions Gallimard ,1986 (松浦寿輝訳、『基底材を猛り狂わせる』、五九頁、一九九九年、みすず書房)

(3) 前掲書、p97 (邦訳、一三一頁)

(4) 渡辺信一郎監督『COWBOY BEBOP』の仲間意識のない連帯、神山建治監督『攻殻機動隊』の stand alone complex、黒田硫黄『茄子』の栄養がないと言われる茄子とそれを食べる人の関係つまり誰の糧にもならない人々の繋がり。

(5) Gilles Deleuze, *Critique et Clinique*, les Édition de Minuit, 1993 (守中高明訳、「裁きと訣別するために」、『批評と臨床』、二五九—二六五頁、河出書房新社、二〇〇二年)

(6) Antonin Artaud, Pour en finir avec le jugement de dieu, *Œuvres Complètes XIII*, p103, Éditions Gallimard,1974 (宇野邦一訳、『神の裁きと訣別するため』、四五頁、ペヨトル工房、一九八九年)

(7) Gilles Deleuze, *Pourparlers*, les Édition de Minuit, 1990 (宮林寛訳、「口さがない批評家への手紙」、『記号と事件』、十五頁、河出書房新社、一九九二年)

その他の参考文献

- Antonin Artaud, Héliogabale *ou* l'Anarchiste couronné, *Œuvres Complètes XII*, Éditions Gallimard, 1982 (多田智満子訳、『ヘリオガバルスまたは戴冠せるアナーキスト』、白水社、一九九六年
- Antonin Artaud, Van Gogh le suicidéde la société, *Œuvres Complètes XIII*, Éditions Gallimard,1974 (粟津則雄訳、『ヴァン・ゴッホ』、ちくま学芸文庫、一九九七年)
- 宇野邦一、『アルトー　思考と身体』、白水社、一九九七年